『沖縄芸術の科学』第34号別刷

沖縄染織品のヨーロッパへの移動について

新田摂子

2022年3月

沖縄染織品のヨーロッパへの移動について

新 田 摂 子

The Movement of Okinawan Textile Collections to Europe

Setsuko NITTA

This paper discusses why Mr. Langewis' Okinawan textile collection moved to European countries and affords a new perspective on Okinawan textile history.

Dr Josef Kreiner researched the volume of Okinawan textile collections in Europe (1982-1985). He found that approximately 15 museums in Europe owned close to 500 pieces of Okinawan textiles. His study also revealed that Mr. Jaap Langewis, a Dutch curio dealer, gathered approximately 300 pieces of Okinawan textiles; however, he did not specify the motive behind the collection.

We found a new manuscript by Mr. Jaap Langewis in 2019 and analysed it with several of his books. Consequently, we found evidence that he visited several ikat production areas, took photographs, and collected the clothes, materials, and tools needed for ikat production from 1952 to 1958. Our research indicated that he aimed to research the ikat technique in Japan. This suggests that he was both a curio dealer and field worker.

1. はじめに

本稿の目的は、在欧沖縄染織品を、誰が、いつ頃、どのような目的でヨーロッパへ移動させたのかを明らかにすることである。Dr. Josef Kreiner 氏による 1982 年から 1985 年に行われた大規模な沖縄関係の文化財調査により、ヨーロッパに約 400 点以上の在欧沖縄染織品が所蔵されていることが明らかになった。この調査を受けて、1992 年から 1993 年、祝嶺恭子氏は、ベルリン国立民族学博物館の沖縄染織品の詳細な調査を行い、2013 年に調査報告書を出版した[1]。

2017 年以降、沖縄県立芸術大学芸術文化研究所伝統工芸研究室は、在欧沖縄

染織品の基礎的調査に加え、在欧沖縄染織品のコレクションの形成について研究を行っている。本研究チームは、2017 年及び 2018 年スイスの Museum der Kulturen Basel、2019 年ドイツの Deutsches Textilmuseum Krefeld 及びオランダの Wereldmuseum Rotterdam で約 300 点の沖縄染織品の調査を行った。その結果、これらの博物館に所蔵されているほとんどの沖縄染織品は、美術商 Jaap Langewis からの購入である事がわかった[2]。

1982 年の大規模な調査は、在欧沖縄の文化財の所在調査を目的としている。そのため、これらのコレクションの形成過程は、未だ研究が進んでいないと言わざるを得ない。つまり、先行研究により、沖縄染織品がヨーロッパに所蔵されていることは示されたものの、なぜ沖縄染織品がヨーロッパへの長い移動をすることになったのかまでは具体的に明らかになっていないのである。

ハンス・ディーター・オイルシュレーガーは、美術商 Jaap Langewis をオランダ系古美術商[3]とのみ紹介している。そのため、先行研究による Jaap Langewis に関する情報は非常に限られていると言わざるを得ない。しかし、本研究チームは、海外研究協力者であるチューリッヒ大学の Dr. Hans Bjarne Thomsen 教授、Museum der Kulturen Basel 学芸員の Stephanie Lovász 氏、元 Wereldmuseum Rotterdam 学芸員の Linda Hanssen 氏 からの資料の提供を受け、Jaap Langewis について以下の情報を得ることが出来た[4]。

2. 美術商 Jaap Langewis の蒐集

2.1 Jaap Langewis、Laurens Langewis の略歴

本研究チームは、Wereldmuseum Rotterdam 元学芸員の Linda Hanssen 氏より、アムステルダムの Tropenmuseum の元学芸員 Rita Bolland（1919-2006）による Langewis 兄弟に関するメモ２枚を確認することが出来た。以下は、このメモによる。

初めに、Jacobus (Jaap) Langewis(1902-1973) は、1902 年 7 月 9 日、オランダの Zaandam に生まれた。彼には一卵性の双子の兄弟 Laurens (Lou) Langewis がいる。

1924 年以前、Langewis 兄弟は、それぞれ別の仕事をしていた。1924 年、22 歳の Laurens Langewis は、United Molasses 社の社員として、当時オランダ

の植民地だったインドネシアへ渡っている。翌 1925 年、Jaap Langewis も Laurens に続いてインドネシアに渡っている。United Molasses 社とは、1911 年に設立された糖蜜を取り扱う会社と推定される。

その後、Langewis 兄弟は、日本軍のインドネシア侵攻により、日本占領下の強制収容所へ入れられている。Rita Bolland は、「彼らは日本軍がオランダ領東インドを占領した時、いくつかのテキスタイルコレクションを失ったが、Lou は日本占領下での彼らの暮らしについて決して語らなかったし、私達も決してそれについて彼に尋ねなかった」と記している。特に Laurens Langewis は、インドネシアの染織品を取り扱う美術商だった。後に Rita Bolland は、Laurens Langewis と共にインドネシアの染織に関する本[5]を執筆している。

1947 年、45 歳の時、兄弟はオランダに帰国。翌年、1948 年 Laurens Langewis は、アムステルダムの現 Tropenmuseum の補助学芸員となる[6]。この後、Laurens Langewis は、1963 年 60 歳まで Tropenmuseum で勤務をしている。

一方の Jaap Langewis は、1948 年から 1952 年 Laurens Langewis と共に博物館で働いている。その後、彼は、ふたたび United Molasses 社に働きに行き、今度は日本と韓国に送られた。

1958 年 56 歳の時、Jaap Langewis はオランダに帰国している。そのため、Jaap Langewis は、1952 年以降から 1958 年までの間に、沖縄染織品を蒐集した可能性が高い。

Rita Bolland のメモから明らかになった事は、以下の通りである。オランダ生まれの双子の美術商 Langewis 兄弟は、第二次世界大戦前、当時オランダの植民地だったインドネシアで仕事をしていた。特に Laurens Langewis はインドネシアの染織品を蒐集していた。彼らがインドネシアで具体的にどのような仕事に従事していたのかは不明であるが、戦中、彼らは、日本軍により強制収容所へ送られている。戦後、Laurens Langewis はオランダに戻り、博物館に勤務していた。一方 Jaap Langewis は、戦後オランダに帰国するものの、1952 年以降、再びオランダを離れ、日本と韓国へ渡っている。

2.2 Jaap Langewis の蒐集時期と地域

Jaap Langewis は、いつからどこで、沖縄染織品を蒐集したのだろうか。初

めにRita Bollandの残したメモによると、1952年以降、Jaap LangewisはUnited Molassus社へ働きに行ったとある。しかしながら、Jaap Langewisは何年から何年までMolassus社で働いていたのかははっきりしない。ただ、Jaap Langewisは、自身の著書 Japanese Ikat Weefselsのなかで、1952年から1958年に日本に滞在していたと述べている[7]。

次に、Jaap Langewisは日本のどこで蒐集を行っていたのだろうか。彼の調査日誌などは見つかっていないため詳細を明らかにすることができない。しかし、Wereldmuseum Rotterdamに所蔵されていた彼の本の原稿Kasuri weefselsには、原稿の最後に「Kyoto, 1954/55」と記されている。また、先述したJosef Kreiner氏の調査報告書によると、イギリスのPitt Rivers Museumは、いくつかのJaap Langewisからの手紙を所蔵している[8]。Jaap Langewisは、Pitt Rivers Museumに手紙を送っており、最初の日付は、京都ステーションホテルから、1956年10月6日である。

さらにMuseum der Kulturen Baselの年報には、「1950年代と1960年代に、Langewisは、MKBへ琉球からの191点を含む1,500点以上の日本からの布、服、仕事の見本や道具コレクションを提供しました。資料は主に京都と東京から船便でバーゼルに到着しました[9]」とある。以上の事からJaap Langewisは京都または東京に滞在していたといえるだろう。

一方で、Jaap Langewisは沖縄へ来島していたのだろうか。先述したMuseum der Kulturen Baselの年報には、Jaap Langewisの手紙の中に、「琉球染織品の蒐集については、戦時中に多くが破壊されたため、琉球諸島よりも日本本土の方が優れていると言われている[10]」とある。つまり、文化財の多くは、戦後の沖縄には残っていなかったため、Jaap Langewisは日本本土で沖縄染織品の蒐集を行っていたと考えられる。

では、なぜJaap Langewisは日本本土で沖縄染織品の蒐集が可能であったのだろうか。大正末に鎌倉芳太郎が沖縄を訪れ、琉球芸術調査を行った。そして日本本土では、昭和初期にすでに沖縄染織品に関する展示会が開かれている[11]。つまり、多くの沖縄染織品は、戦前期に沖縄を離れ、日本本土へ移動していたといえよう。

沖縄戦において、沖縄はかけがえのない数多くの貴重な人命のみならず、残されていた重要な文化財の多くを失った。Jaap Langewisが日本を訪れた1952年は、

戦後7年後、サンフランシスコ講和条約が発効、琉球政府が設置された年でもある。この時期にオランダ人美術商が、自由に沖縄に出入り出来たとは考えにくいのではないだろうか。つまり、Jaap Langewis が日本本土で蒐集した沖縄染織品は、戦後数年の間に沖縄から本土へ移動したものではなく、おそらく戦前にすでに沖縄を離れ本土に移動していたと考えるのが妥当であろう。

以上の事から、Jaap Langewis は、1952年から1958年の間、京都と東京に滞在し、日本及び沖縄染織品の蒐集を行なっていた。一方で Jaap Langewis が沖縄に来島していた可能性は低いだろう。なぜなら、沖縄染織品は、1950 年代には沖縄戦の戦禍を免れ日本本土に移動していたためである。そのため、Jaap Langewis は、戦前に沖縄を離れていた沖縄染織品を日本本土で蒐集したといえる。

2.3 Jaap Langewis の蒐集理由

なぜ Jaap Langewis は、日本及び沖縄染織品を蒐集したのだろうか。Rita Bolland のメモには、何年かは不明であるが、染織を担当していた Tropenmuseum の学芸員の Dr. Jager Gerlings（1917-2010）は、Jaap Langewis に、絣、バティック、plangi の模様のある日本の染織品のコレクションとこの技術に使われる道具の蒐集を頼んだとある。

Dr. Jager Gerlings は、染織担当の学芸員として、日本における絣や染め物に関心があったと推定される。そのため、Jaap Langewis の蒐集のきっかけは、Tropenmuseum の学芸員からの依頼であったといえる。

さらに Jaap Langewis は、1955 年、Museum der Kulturen Basel の館長 Dr. Alfred Bühler（1900-1981）に日本の染織コレクションに興味がないか訪ね、コレクションの蒐集を打診している。彼からの要求により、染織品の技法に関するサンプルの保存に焦点をあてたという[12]。Dr. Alfred Bühler も、1930 年以降アジアとオセアニアの染織技術について多くの調査を行った人物である[13]。

つまり、Tropenmuseum の Dr. Jager Gerlings も、Museum der Kulturen Basel の Dr. Alfred Bühler も、ともにアジアの染織品に興味を持つ染織品担当の学芸員であった。彼らは日本の染織品とその技術に関心を持っていた。そして Dr. Jager Gerlings は、Jaap Langewis に日本の染織品の蒐集を依頼、Dr. Alfred Bühler は蒐集を打診された。

そして Jaap Langewis によってそれぞれの博物館に納められた日本の染織品のうちに、沖縄染織品が含まれていたと考えるのが妥当であろう。つまり、彼らは最初から沖縄染織品に興味があったわけではない。実際に Museum der Kulturen Basel の Jaap Langewis コレクションは、日本関係の資料が 1,500 点以上、うち沖縄関係資料が 191 点である。

では、Jaap Langewis は、どのように沖縄染織品に出会ったのだろうか。Jaap Langewis は、「日本に滞在していた 2 年間の間に築くことのできた多くの関係を通して、これらの琉球染織品を持ち出すことに成功しました。[14]」と Museum der Kulturen Basel への手紙に記している。具体的に彼が日本で築いた関係がどのようなものなのか、現時点では不明である。

まとめると、Jaap Langewis の蒐集は、Tropenmuseum の Dr. Jager Gerlings からの依頼がきっかけだった事がわかった。また、彼は、スイスの Museum der Kulturen Basel の Dr. Alfred Bühler に自ら日本の染織品の購入を打診している。それぞれの学芸員達は、アジア及び日本の染織品とその技術に興味があった。そのため、Jaap Langewis も初めから沖縄染織品に興味があったとはいえない。しかし、Jaap Langewis が京都や東京に滞在するなかで、沖縄染織品に触れる機会があり、蒐集に繋がった可能性が出てきたといえよう。

3. Jaap Langewis による書籍

では、Jaap Langewis は、日本の染織品の蒐集を依頼されただけの美術商だったのだろうか。オランダに帰国後 1960 年代に、Jaap Langewis は、絣織物に関する 2 冊の本を出版している[15]。1960 年に Geometric Patterns on Japanese Ikats、1963 年に Japanse Ikat Weefsels の 2 冊である。そして、Wereldmuseum Rotterdam は、彼による原稿 Kasuri weefsels を所蔵している。

3.1 Geometric Patterns on Japanese Ikats

1960 年に出版された Geometric Patterns on Japanese Ikats は、絵図絣を中心に西日本の絣織物を紹介している。本書には、全部で 22 点の絵図絣の裂の写真が掲載されている。写真のキャプションには、鳥取、愛媛県松山と砥部[16]、福岡県の久留米と筑後川の 5 つの地域が記されている。鳥取の絣は弓浜絣か倉吉絣、

愛媛の松山と砥部は伊予絣、福岡県の久留米と筑後川地域の絣は久留米絣の事であろう。これらの産地は、全て木綿絣の産地である。

本文には、日本の織物における幾何学模様の役割、木綿の布団地にみられる絣模様の象徴性、特に亀に象徴される長寿への望み、八十八を表す絣模様とその意味などが記述されている。つまり、この本は西日本の木綿絣の裂の写真を紹介しながら、そのモチーフの持つ意味について考察している。以上の事から、この本における Jaap Langewis の絣織物に対する興味は、モチーフの持っている象徴性といえる。

3.2 Japanse Ikat Weefsels

Jaap Langewis は、1963 年に出版された Japanse Ikat Weefsels において、冒頭に絣織物産地を示した地図（写真 1）、絣の発生とその語源、絣技法の歴史や解説、藍染めについて、最後に各産地の絣織物の特徴を述べている。

はじめに、本書は、冒頭に絣産地が記された日本の地図を掲載している。この地図には、北海道と沖縄は含まれていないものの、奄美大島は記載されている。

この地図には、米沢、小千谷、絹村[17]、愛知川、能登川、奈良、倉吉、広瀬、松山、久留米、鹿児島が丸印でマークされている。山形県米沢で織られた織物は、米琉、新潟県小千谷で織られた織物は小千谷縮、絹村は現小山市で結城紬、滋賀県の愛知川、能登川は近江上布、奈良は大和絣、鳥取県倉吉は倉吉絣、島根県広瀬は広瀬絣、愛媛県松山は、伊予絣、福岡県久留米は、久留米絣、鹿児島は薩摩絣の産地である。

本文中にも、越後上布、小千谷縮、米琉、能登上布、近江上布、結城紬、広瀬絣、倉吉絣、久留米絣、薩摩上布、大島紬の計 11 産地の素材の特徴や歴史が述べられている。これらのうち、薩摩上布、近江上布、能登上布、越後上布、小千谷縮は麻織物、久留米絣、広瀬絣、倉吉絣は木綿織物、大島紬、米琉、結城紬は絹織物である。また小千谷縮以外の全ての産地の絣織物の写真が掲載されている。

先述した Geometric Patterns on Japanese Ikats は、九州、山陰、四国の木綿絣織物が紹介されていた。一方、Japanse Ikat Weefsels は、北は山形県から南は鹿児島県までの各産地の絣織物について紹介している。そのため、Japanse Ikat Weefsels は最初の本 Geometric Patterns on Japanese Ikats よりも広範囲に、

日本の絣織物について紹介しているといえよう。

続いて、Jaap Langewis は、絣の発生と語源についても言及している。具体的には、久留米絣を創始したと伝えられる井上伝や、伊予絣を創始したと伝承されている鍵谷カナという女性について述べている。また、いくつかの先行研究により紹介された絣の語源は、現在でも伝承されているものと類似しており、おおむね妥当である。つまり、Jaap Langewis は、各地の絣織物を紹介するだけではなく、絣そのものの発生や語源についても研究していたといえよう。

加えて、Jaap Langewis は、絣技法についても取り上げている。なかでも、絣技法の一種である絵図台、板締について紹介している。絵図台は、種糸に印しをつける際に、筆等を使う方法と、型紙を用いる方法の 2 通りが説明されている。板締については、板の数が 50 枚から 150 枚と模様のサイズによって板の枚数が異なることなどが記述されている。これらの 3 つの絣技法は、作業をしている写真と共に紹介されている。

他にも、Jaap Langewis は、藍染めについて、藍壺、温度の管理、男性の仕事であることを述べている。

以上の事から、Jaap Langewis は、Japanse Ikat Weefsels で日本全国の絣織物について広範囲に取り上げていることがわかる。さらに、彼は、絣の由来や複数の絣技法、藍染めについても写真と文章で解説している。つまり、Japanse Ikat Weefsels は、Jaap Langewis による日本各地の絣織物の技法や産地についての本といえる。

3.3 Kasuri weefsels

Wereldmuseum Rotterdam には、Jaap Langewis による Kasuri weefsels というタイトルが書かれた原稿（写真 2）が残されている。Jaap Langewis は、Kasuri weefsels で絣織物の素材、絣技法、藍、機について解説している。

初めに、Jaap Langewis は、苧麻、木綿、紬、紙糸の 4 つの素材を取り上げている。苧麻は、新潟県塩沢の苧麻の糸（写真 3）や、苧麻繊維の夾雑物を取り出す道具[18] のスケッチ（写真 4）が掲載されている。木綿は、山陰の糸紡ぎの様子（写真 5）や、綿花をはじく弓（写真 6）が、錘のスケッチと共に解説されている。紬は、結城紬の糸紬ぎの様子と紬糸（写真 7）、また宮城県白石の紙布に用いられる紙糸（写

真 8）についても紹介されている。

次に、絣技法について、種糸、種糸に型紙を使う技法、よこへ台、板締の 4 つの絣技法について言及している。具体的には、山陰の種糸を使って絣に印をつける技法（写真 9)、鳥取の種糸に、型紙を使って印をつける技法（写真 10)、倉吉のよこへ台と（写真 11)、滋賀県能登川で使用されていた板締という技法についても掲載されている（写真 12)。

続いて、彼は、鳥取県での藍染めについて解説し、本書には、藍畑、藍の収穫、島根県広瀬の藍の甕場（写真 13)、藍染めの様子の写真が添付されている、

最後に、本書では、結城紬に使用される腰機（写真 14）や、山陰地方で使用されている高機（写真 15）も紹介されている。またどの産地のものか不明だが、柄帳の写真も添付されている（写真 16)。

以上より、Kasuri weefsels は、日本各地の絣織物の素材や絣技法についてより詳しく説明されている事がわかる。先述した、Japanse Ikat Weefsels では、素材の詳しい説明及び機については触れられていない。また、Japanse Ikat Weefsels において、絣技法は、種糸と種糸に型紙を使う技法、板締の 3 つが紹介されていたものの、Kasuri weefsels は広瀬のよこへ台まで言及されている。一方、原稿である Kasuri weefsels は、Japanse Ikat Weefsels のような各産地の説明や裂は紹介されていない。つまり、Kasuri weefsels の特徴は、絣の技法や素材、機に重点が置かれている点である。

また、原稿である Kasuri weefsels には、絣織物の作業をしている写真そのものがそのまま添付されている。ではこれらの写真は、誰が、どのように撮影したのだろうか。

この原稿の最後には、「全ての写真は筆者自身によるものである」という説明が加えられている。つまり、Jaap Langewis は、実際に日本各地の絣産地を訪れ、現地の作業写真を撮影していたのである。

写真のキャプションから確認できた地名は、栃木県結城（写真 7)、滋賀県能登川（写真 12)、愛媛県松山の垣生村（写真 17)、鳥取県倉吉（写真 11)、島根県広瀬（写真 13)、福岡県久留米（写真 18）6 の地域名である。そのため Jaap Langewis は、栃木、滋賀、愛媛、鳥取、島根、福岡には実際に訪れていたといえよう。また、Japanse Ikat Weefsels には、新潟県小千谷の雪晒しの写真が掲

載されている。そのため、Jaap Langewis は新潟県まで足を伸ばしていた可能性がある[19]。

他に、Kasuri weefsels には、写真以外に裂（写真 19）、糸（写真 3 や写真 7、写真 8）、種糸（写真 09）などの実物資料が直接原稿に添付されている。裂は、現地を訪れなくとも、古美術商などを通して、購入することができた可能性があるだろう。しかし、絣の糸そのものや種糸は、おそらく現地に訪問しないと入手することは難しかったのではないだろうか。つまり、Jaap Langewis は、これらの実物資料も写真やスケッチと同様に現地で採取したと考えられる。

最後に、Kasuri weefsels の最後のページには、「Kyoto, 1954/1955. J.Langewis」と記載がある。つまり、Kasuri weefsels は、Jaap Langewis が 1952 年以降の日本滞在中に、日本の絣織物についてまとめた原稿であるといえよう。一方 Japanse Ikat Weefsels の出版は、1963 年である。1958 年の帰国後、1963 年にまとめられた本が Japanse Ikat Weefsels であるといえよう。

以上より、Kasuri weefsels は、Jaap Langewis が日本各地の絣織物産地で撮影した作業の写真、実物資料、スケッチが添付され、特に絣技法について言及していることがわかった。そのため、Jaap Langewis は、1952 年から 1958 年の間、日本各地の絣織物産地の調査旅行をしていたと結論づけられる。美術商 Jaap Langewis は、博物館の学芸員に依頼されて京都や東京で日本の染織品を蒐集したばかりではなく、特に絣に興味を持ち日本各地の絣織物産地を訪ね歩いたフィールドワーカーだったのである。

4. おわりに

ヨーロッパに沖縄染織品をもたらした美術商 Jaap Langewis について調べた結果、以下の点が明らかとなった。

オランダ生まれの双子の美術商 Jaap Langewis は、Tropenmuseum の学芸員からの依頼がきっかけで、1952 年から 1958 年の間、日本の京都と東京に滞在し、日本の染織品の蒐集を行っていた。当初は日本の染織品を蒐集対象としていたが、日本本土で沖縄染織品も蒐集している。

また、Jaap Langewis は、2 冊の日本の絣織物についての本を出版している。特に、Japanse Ikat Weefsels は、Jaap Langewis による日本の絣織物の産地や技

法に着目した本である。さらに、Jaap Langewis の原稿である Kasuri weefsels から、Jaap Langewis 自身が日本の絣産地を実際に訪れていた事がわかった。

以上より、Jaap Langewis は、特に日本の絣について調査していた美術商だったといえよう。つまり、沖縄染織品は日本の絣織物産地をフィールドワークした Jaap Langewis により、蒐集・移動されたのである。

本稿では、Jaap Langewis と日本の絣織物との関連性について明らかにすることが出来た。しかしながら、Jaap Langewis と沖縄染織品との関連については未だ不明な点が多い。今後は Jaap Langewis と沖縄についてもより具体的な分析を進め、在欧沖縄染織品のコレクションの形成について明らかにしたい。

写真１　絣産地地図

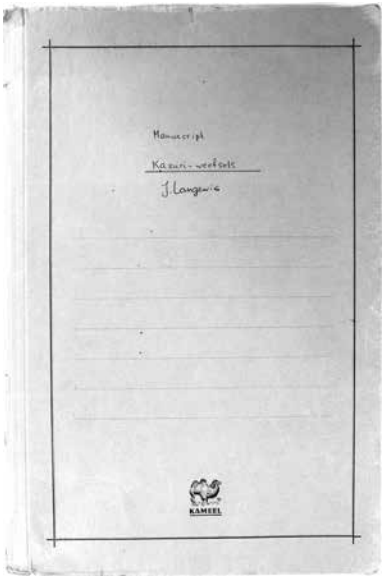

写真２　Kasuri weefsels 表紙

写真３　苧麻糸

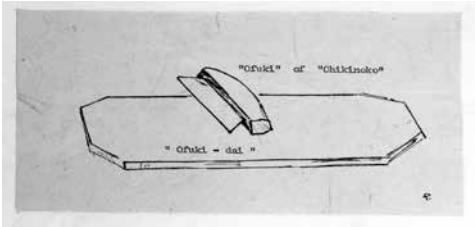

写真４　お引き台スケッチ

写真５　木綿の糸紡ぎ

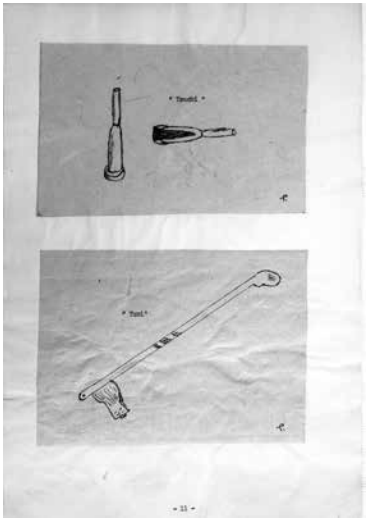

写真６　綿打ちの道具

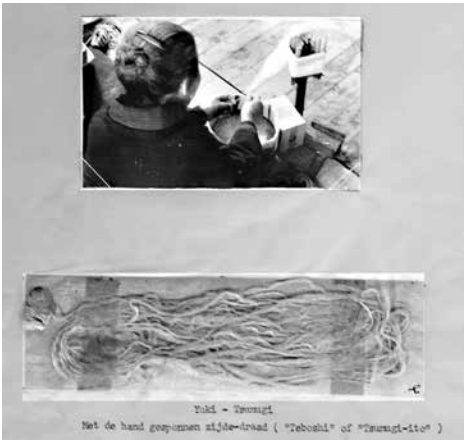

写真７　紬の糸紡きと紬糸

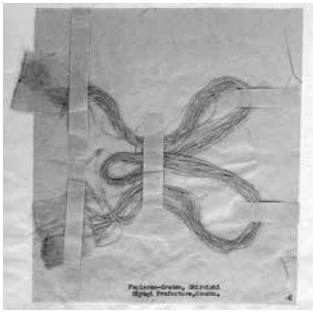

写真８　紙糸

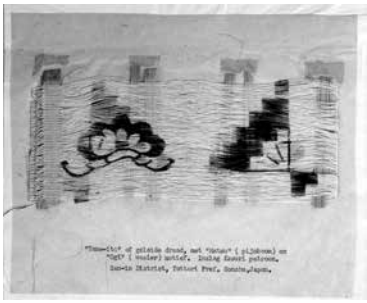

写真９　種糸

写真 10　型紙を使った印付け

写真 11　よこへ台

写真 12　板締

写真 13　甕場

写真 14　腰機

写真 15　高機

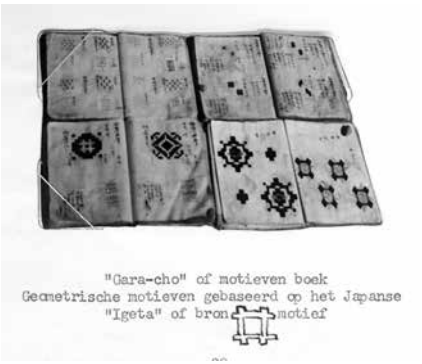

写真 16　柄帳

写真 17　垣生村

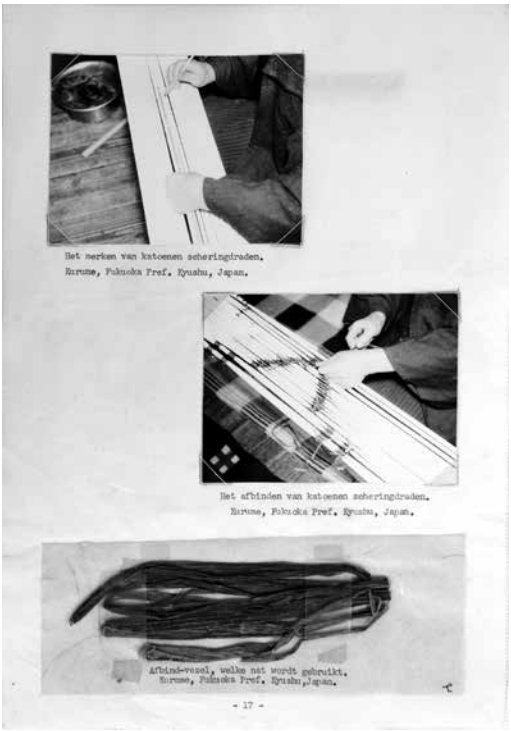

写真 18　久留米の絣括り

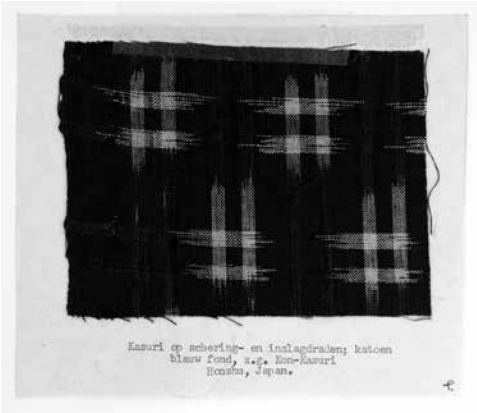

写真 19　紺絣

注

1 『ベルリン国立民族学博物館所蔵　琉球・沖縄染織資料調査報告書』一般財団法人沖縄美ら島財団、2013 年

2 Museum der Kulturen Basel 所蔵の沖縄染織品 196 点のうち、7 点は Jaap Langewis 以外からの購入である。Wereldmuseum Rotterdam 所蔵の 78 点のうち、3 点は Jaap Langewis 以外からの購入で、そのうち 2 点は Felix Tikotin からの提供である。Deutsches Textilmuseum Krefeld は 42 点全てが Jaap Langewis からの購入である。

3 ハンス・ディーター・オイルシュレーガー「ヨーロッパにおける沖縄関係コレクションの歴史と現状」『世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展 - ヨーロッパ・アメリカ秘蔵』ドイツ - 日本研究所、1992 年、p.40

4 資料① Jaap Langewis の書籍のコピー 2 冊（Thomsen 教授より）② Rita Bolland の資料（Linda Hanssen 氏より）③ Jahresbericht2019, Museum der Kulturen Basel, 2020（Stephanie Lovász 氏より）

5 TH. P. Galestin, L. Langewis, Rita Bolland, *Lamak and Malat in Bali and A Sumba Loom*, Royal Tropical Institute, 1956

6 Laurens は Rita の同僚として Tropenmuseum で働いていたといえるだろう。

7 J. Langewis, *Japanse Ikat Weefsels*, Delft, Ethnografisch Museum in Delft, 1963, p.74

8 Yu-Ying Brown "Ryūkyūan Resources in Britain An Introductory Survey", *Sources of Ryukyuan History and Culture in European Collections*, iudicium verlag GmbH München, 1996, p.131

9 Jahresbericht 2019, Museum der Kulturen Basel, 2020, p.60

10 同上、p.60

11 拙稿「日本本土で開かれた沖縄染織品の展覧会について」『沖縄芸術の科学』33 号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2021 年 3 月。

12 Jahresbericht 2019, Museum der Kulturen Basel, 2020, p.58

13 Stephanie Lovász, Textile Treasures from Japan in the Collection of the MKB: Collectors of the Okinawan Textiles, International Symposium: Arts

of the Ryukyu Kingdom, University of Zurich, 2018.12.15

14 Jahresbericht 2019, Museum der Kulturen Basel, 2020, p.60

15 この他にも 1967 年に 6 本の論文を書いているようであるが未見である。

16 愛媛県の砥部町は松山市に隣接している市。

17 絹村は栃木県に存在していた村。栃木県は 1956 年に桑村と絹村を廃し、桑絹村を設置。1961 年桑絹村を桑絹町、1965 年には、桑絹町を廃し、小山市に編入。

18 ohuki はお引き、ohuki-dai はお引き台のことか。

19 石川県の能登上布、山形県米沢の米琉、鹿児島県の薩摩絣、鹿児島県奄美大島の大島紬は、Japanse Ikat Weefsels に裂と共に紹介されている。しかし、これらの絣産地の織物作業をしている写真は、Kasuri weefsels にも Japanse Ikat Weefsels にも確認出来ない。そのため、能登上布、米琉、薩摩絣、大島紬は、裂のみを入手し、実際には現地へ行っていない可能性もある。特に、大島紬は、締機という特徴的な絣技法を使っている。もし、Jaap Langewis が奄美まで渡っていたら、締機についても何らかの写真や記録を残している可能性があるが、現在の所発見されていない。

参考文献

『世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展 - ヨーロッパ・アメリカ秘蔵』ドイツ - 日本研究所、1992 年

J. Langewis, *Geometric Patterns on Japanese Ikats*, Delft, Ethnografisch Museum in Delft, 1960

J. Langewis, *Japanse Ikat Weefsels, Delft*, Ethnografisch Museum in Delft, 1963

Jahresbericht 2019, Museum der Kulturen Basel, 2020

Josef Kreiner, *Sources of Ryukyuan History and Culture in European Collections*, iudicium verlag GmbH München, 1996

この研究を行うにあたり、海外研究協力者のチューリッヒ大学 Dr. Hans Bjarne Thomsen 教授には、プロジェクト全体を通して多大なご協力を受けました。また、Museum der Kulturen Basel 学芸員の Stephanie Lovász 氏、元

Wereldmuseum Rotterdam 学芸員の Linda Hanssen 氏からは、Jaap Langewis に関する貴重な情報をご提供いただきました。また、私達の調査を受け入れて下さいました Museum der Kulturen Basel、Wereldmuseum Rotterdam、Deutsches Textilmuseum Krefeld の関係者の皆様に感謝申し上げます。この研究は、JSPS 科研費 JP19KK0005 国際共同研究強化（B）「在欧沖縄染織品の調査とそのコレクションの成立に関する研究」の助成を受けました。この場を借りて深く御礼申し上げます。